

藁益漁隱泚澤解遺州
雙子海居士依田高拙評

曲育亭雜記

第三輯上編

松軒隱士流美正幹編輯



曲亭雜記卷三上編

目録

○永代橋破落の紀事

○佐倉の浮田 安永以來のもやり風

○兩國河の奇異 庚辰の猛風 美日の斷木

○年の和名並月の異名考餘

○古きもんト物の盃考

○疊翠軒の記

○竹をめぐる辭



337582

文章會第二集

八月十五日發行

今の文章は漢文直譯のやうなるもあり洋文直譯のやうなるもあり或わ今古雅俗を雜へ或わ語格句調を濫り甚しきわ意義の解し難きものありて亂雜極まれりといふべし日本文章會は此弊を正し文義を明にし文品を高くし國文の精華を發揚せんとんことを期するものよして本集は同會員の佳文を採録せしものなり世の文學家の精讀すべきわ勿論公私學校の國文教科書さるさばこゝなき規範といふべし
目次は左の如し

額三樹傳	依田
李國翁小傳	中村
高橋東岡夫妻の傳	根村
國之光發行の祝詞	村正
養賢眞實序	中村
國學新論自序	集高
ふたさへ酒よ酔にけり	野由
大石内蔵介等賜死圖に書添へたる詞	正正
師傳のつぐみ	山正
花をりにふれたる	米山
障眼	杉幹
櫛むへき孝女	田百
うそつき老爺	野由
漢學及佛敎渡來の事を記す	中野
附録 日本文章會規約	村義
	象之

御注	定價		府外	
	冊	金	冊	金
御注文之節ハ●府、縣、郡、區、町、村、番地、姓名等詳細御申込ヲ要ス●御轉居ノ節ハ新舊兩所御報知ヲ乞フ	一冊	金十五錢	一冊	金十六錢
	五冊	金六十八錢	五冊	金七十錢
●本書ハ前金ニアラザレハ遞送セス●代價ハ郵便爲換、小爲換、又ハ通運便ニテモ御送リアリタシ●郵便爲換ナレハ芝口郵便局へ御振り込アルベシ●郵券代用ニテモ不苦候●前金相切レナハ直ニ遞送ナ止ムベシ	十冊	金一圓十錢	十冊	金一圓十錢
	二十冊	金二圓	二十冊	金一圓廿錢

發行所 東京市京橋區南傳馬町一丁目十二番地
 日本文章會假事務所
 賣捌所 大阪市南區心齋橋筋一丁目 松村九兵衛

914.5 Ta 624r2

曲亭雜記卷三上編

養笠漁隱龍澤解遺草

學海居士依田百川批評

松軒隱士 渥美正幹編輯



○深川八幡宮祭禮の日永代橋破落の紀事

文化四丁卯年秋八月。深川富岡八幡宮祭禮あり。三十餘年中絶せしを十
 五日は渡るべかりしを雨天まで延引。八月十九日は渡りし也。當日巳の中
 刻。永代橋群集より。南の方水際より六七間の處の橋桁を踏落して。水
 没の老溺男女數千人は及べり。翌日までに尸骸を引あげしもの無慮折むら
 一橋殿御見物の爲もや。御下やわたへ入らせらる。御船まで御通行ありし

○永代橋破落の紀事

かは、己の時より人の往來を禁めて橋を渡とせず。この故は北の橋詰に見物の良賤、彌が上は聚合たれば數萬人も及べり。かゝて御通行果てす。渡れといふ程しもあらず。數萬の群集立駈ておのゝ先を争ひしかば、真先は渡りしものハ恙もなと渡り果しよ。その迹より急と勢ひよて、忽橋を踏落しけり。この立籠の人一坪は五十人と推積りても、踏落したる十間の内は四五百人ふるべし。まひて跡なるものハとりとも知らず。人を推つ推されて落るものいとはなりけん想像るべし。この橋桁をのみ踏折りたるよあらず。橋杭の泥中へめりちみ志より桁さへ踏折られし也。前は進みしもの橋落たりと叫ぶをも聞ひでせんかたなりしよ。一個の武士あり刀を引抜きてさへあげつらち

振りしかば、是より人みな驚怖れてやうやと跡へ戻りしとぞ。このちたる邊のなりければ群集の人の勢ひにて、橋梁を泥中に踏込みしなり。後橋を掛更らるゝときこのこと聞えて、なほ三四尺も杭のとまらずば、永代橋はのちくまで船わたしはなるべかりしとこのことよく知れるもの、のいひにま

水底へドロ

通油町なる書肆鶴屋喜右衛門は年來使れたる飯焚男某。人々名をいひて三歳よふりける王の娘よ。この祭を觀せんとして背負ひつ。永代橋をなれば渡る程よ。前なる人々の俄よ叫ぶ聲せしに。五六間先立ちて風車をあきなふもの。姿ハ見えざれども荷よさへたる風車の見えたるが。よろめくやうよて見えすなりしを怪しと思ふ程よ。橋の落りしと叫ぶ程しもあらず。白刃をうち振るものさへあるよつち驚きつ。人もうらもよ北の方へ戻りしかば、王從恙なき事を

得たり。おの鶴喜が娘の後妻の初子にて兩國米澤町な
る賣藥店稀飯丸の息子に嫁して今なほあり

の次の年 五年 文化 元飯田町中坂下ふる湯屋有馬屋與惣兵衛に使れたる火
焚男某甲も。永代橋の落たるとき衆人と共に入水せしもの也。おの越後新
瀧のものにて。海邊よ入となりしかば。泳ぐむごも熟したれども。入水の女足
はすかりて。思ひのまに泳ごとく得あらず。共は溺死すべかりしを。辛として水
中よて著たる單衣を脱捨て。すがるものを蹴返し拂ひ返など一つ。やうやく
恙なき事を得たる也。人は携らるるとき足をそめて奉公ふりがければ。その
九月故郷へまかりて養生しつ。病愈たればこの春又江戸へ來つといひける。こ
の男の話よ。とどめ先へ落たるもの續きて落るもの打れて。矢庭に死たるも

多かるべし。又同く處へいとなりも落累りて。下よなりたる泥中へ推理められ
しも多かりけんといひませ。

予ハ妻の所縁ありける山田屋といふ町人。當時深川八幡門前をなり。おの
ものかねてより祭の日より子達を携て來ませなどいれしに。富岡の大神は予
が産沙よておしします。三十餘年前彼祭の渡りし折。予ハ尚總角よて深川よ
在りしかば。故主の供よ立て觀たりき。としも由縁あるおほん神の祭りなれば。
子どもは觀するもよひるべしと思ひしかば。その前夜妻よ誨へていふやう。翌祭
を觀よいなば朝ごと出づべし。いぬる比永代橋を渡りつる折見たるよ。彼橋の
欄干の朽たる處あり。安永の末よありけん。中洲の納涼のどむつありし日。

ある夜仙臺候に花火を立らるるとして、常はいいまほしの人群集せし折よ。いと多かる茶店も人居あまりて。大橋も聚合人いとららるる数も知らざりければ、終る橋の欄干を推倒して。入水せし老弱多かりき。これを思ふも翌も亦水代橋をわたる人多からんよ。欄干を推倒すまじきもあらす。縱令彼橋も臨むとも。人群集せば引返して大橋を渡りゆへん。朝の出立早からはなれど、群集すべからず。この義をよく思ふべし。かゝるころを得せしむば、十九日は未明より支度して。その朝六つ半時比より妻と子どもを出しやりけり。かゝて午の初刻の比。出入の魚商人の來て。今がた河岸小田原町よて聞河岸なり候よ。祭見物の群集より永代橋落たり。こそ怪我も多からめ。詳ある事ハ

いまだ知らずといひ罵る程よ。やうくこの尊高と聞えて人の驚き大かたならず。近隣の人もむらものゝ來て。今朝おん内かたのお子達を俱して。祭見よ出ませし折見かけまゐらせたりき。こそ御心ごころおぼすらめ。と人遣して安否を問はんまじきや。いづれものなかりしよ。ご答ていふかゝりて思ふよしありければ。知らるる如く今朝いとほやと出たりければ。女子どもの足なりとも。五時前後より永代橋を渡りけん。件の橋の落たるは四時なればご聞ゆれば。必恙あるべからず。とばれ迎へ未の比よりつかいすべければ。おぼそやかりといふ。人皆いぶかづて猶かよかといふも多かり。かゝて未下る比。迎の人挑灯もたいてつかいすときを示すやう。大橋も朽たれば兩國橋よりかへり

来よけん。山王神田の祭禮よ、志なかりて。渡り初るも遅かるべし。祭の果る
 夜よも入なん。かへといひよく群集まつべし。足弱どもを扶けひきて。怪我な
 らざといひ付たり。これよりの後近きわたりの友達より消息して安否を問
 りもありいひかど。己の件の時刻をはかりて。恙あらどと思ひしかば、初よりし
 て些とぞわがす。この年長女ハ十四歳。その次ハ十二歳。孩兒ハ十歳。季女
 ハ八歳なりければ。走りあるきも人並なり。いかばかりの事あるべしやと思ひつゝ
 待程よ。この夜成の半比よ皆恙なく歸り來にけり。叔事のやうを尋るよ。かね
 て示たまひしよしも侍れば。今朝ハ特さら路を急ぎて。また五、よならんこ
 と思ふ比よ。永代橋を渡り果しかば。渡る人も多からざりき。かゝて山田屋へい

きて。棧敷に登りまつりを觀て待りけるよ。四半時よもやありけん。鶴屋のかよ
 ひ伴頭金助夫婦が隣棧敷へ來て。只今永代橋落て候。下僕等ハ真先よ渡
 り果しかば恙もあらず。跡なるもは入水せしもあるらんといひよき。さばれ驚く
 程の事とも覺えざりしよ。祭の果る比よりこの噂大かたならず聞えしよ。胸う
 ちさわがれたれど。迎人よ仰付られしよしも承りて。あいたこと歸路よ赴とよ。
 寺町通りハなほ人稠ならんこと。木場よまはり冬木町をよぎり。海邊橋又高
 橋を渡り一比ハ群集にみちをすりあへず。橋ハゆらくとゆらめくよ。この橋
 も今落るぞと人の罵るよ胸潰れ。辛うじて兩國橋まで來よければ。活たる心
 地し侍りさといひけり。吾ハ彼橋の落べしと思ひざりしが。安永の比大橋の

欄干を推倒せしこともあれば人多く出ぬ程まで。今朝はやく出しやりし、
われながらよくも量りつるかなどいひ誇りて笑ひよけり。

かくて次の日。八月廿日彼橋の落たる光景を見ればやと思ひて。晝飯をはやく果し
つ。孩兒を將て兩國橋をうち渡り。お船藏通り大橋のほとりより。永代橋の
南の詰までゆく程。水死の棺早桶と唱を昇きつゝ。あなたさまよ来るもの引
もきらす。そが中よ市谷のものぞごよ。兄弟三人祭見よ出て。三人ながら溺
死せしなど。咳きつゝゆともありけり。この日かへさよ大橋のほとりなる茶店よ
憩ひて。なほきのふの事を聞ふ茶店の女房のいひけるは。きのふより永代橋
の落たる折見けるよ。橋のふかばは忽然と白氣立て。煙の如く見えけり。あ

れは船火事よあらずやなどいひつゝ。人もこれも眺望してありけるよ。きはらこし
て永代橋の落て。人あまた入水せしよし聞えしかば。さては橋の白氣は落る
人の驚きたる思なりけんぞ。思ひ合し侍りきといへり。この水没の尸骸よ。主あ
りて引どりしは四百八十餘人。この町奉行へ訴出たる書あげの趣也。この後
品川上總房州の浦々へ流れ當りしも多とあり。又主ありて尋ねしよ知れど
るも多かりといへば。凡二三千人も死したらん歟。いまだ知るべからず。むかし
貞和年間。京なる四條河原まで勸進猿樂の棧敷崩れて。人多く死たる由
は太平記に見えされど。此永代橋の落たるは。それよも彌増むべき禍よぞ有ける。
この頃夜なく。彼橋の邊の水中は陰火のもゆる事もあり。又鬼哭の聲のせ

しつてもあればとて。南の橋詰に板壁の小屋を造りて。一個の法師鉦うち鳴らし。常念佛を唱へてを。爾後橋を掛更られて。常念佛のあらずなりよき。又その翌年八月。一周忌を吊る家家の施主ありて。回向院にて大施餓鬼を興行せし事もあり。又河施餓鬼を一つるもありけり。

永代橋。大橋。新大橋。一名あつま。是まで受負人ありて。橋の南北の詰に。板壁の小屋を造つらひて。番人二人をり。常に長き竹の柄を付るを持て。武士醫師出家神主の外に。橋を渡るものより。一人別は錢二文づゝ取けり。人の渡らんとするを見れば。件の衆をぞ一出す。その人錢を衆に投入して渡りけり。この故は橋の朽たるも。掛更ることを速ならず。己むことを得ざるをいひ。假橋

を造りて本普請を延したり。こゝをもてこたひの如き怒あり。なほいふものも多かりしや。當時願人ありて。已來海船江戸入の荷物大小より。一箇も付水揚運上いければかりつゝ取之事を御免あらば。右の三大橋の掛更に。公儀に申上るよ及はず。町人百姓より錢二文づゝ取ることなく。破損已前掛かへ可仕願ひなきは。御詮議の上その願ひに任せたまひしにや。

こゝ遠からぬことにて。只今四十前後の人いよく知りたるもあらんを。遠きかひの人の爲。又わがまつまののこら得よもならんことを。そらよきとして自ら警め。且人をもいましむるもの也。必よ人々群集せる祭見物。女子どもをつかひす。要なき事なり。かの日わが族の恙なかりし。幸ひよ一て免れたる

○永代橋破落の紀事

也。必是わが智慮のすぐれたるよりあらざるかし。壬辰閏月

中洗稿

百川云。此永代橋の斷れ落し物語ハ。當時の大變よりて。明曆火災の後
より。斯と多との人の死せしことなりといへり。大槻盤翁が奇文欣賞のうち
よ。當時の人の記したる漢文あり。又山東京山が蜘蛛の糸巻よもこの事を
語るしより。諸家の紀事なほ此外よも數多あるべし。諸家の文には。通行の
人群集して。その重みよりて落しこのみざるして。橋の朽損して危かり
しよしを語るをす。又一橋殿が舟行せしよりて。橋上の人を一時といめ
しゆゑは俄にいかに及びこの事も語るをす。思ふよこの大禍の源をいふ時
ハ。當時の勢をもて。みだりよ人の通行を禁じて。一時よわたせしゆゑなる

こゝ明なつ。これを言いざりしハ幕府の威を懼れてなるべし。曲亭が見こゝよ
及びしハ。然すがよよく推し量れりといふべし。文章の精微よりて盡せるこ
ごハ。例の妙筆いふまでもあらざる。

○佐倉の浮田 ○安永以來のはやり風

文化五年戊辰の秋八月。下總佐倉の洪水ハ。風聞こゝよも聞えしころ。その
月十三日の事なりき。予いたましく著述の勞を保養せんこと。獨そより立
出て。あちこちと道途しつ。真菰が淵と呼なせる。おほん整端の出茶屋な
る。牀几は尻をうちひけて。まはしやすらひたりし折。下總の旅人等よ。その日
三人なり。その内に老人あり。その名を問へば與五右衛門といへり。かゝる初よものいはれよけつ。よつてかの水の虚

○佐倉の浮田

實を問ひしよ。その人答て聞かせたまふが如く。こたみ佐倉の事いとも。近來
 稀なる大水なり。つやくそら言ひ候はず。まかるよかの城下なる田地ども
 の。或い十間ばかり或い二十間四方づよ皆きれて、水の上よ浮みたり、それを
 又並木の松の大きなる。伐らば白よもまつべき幹よ。葉の繩もて繫き置たり。何
 もの所為といふことを知らず。天明て人皆これを見て。驚きあやしむものな
 ことなん聞て候ひしごむたりき。その時同行の老人與五右衛門ごかいふも
 の云。田地の水よ浮きたるよしな。つらくごおもひみるよ。むかし佐倉の城
 地を築かれしとき。今の城下の邊よ、沼溝の多かりしを。竹木芥空の類ひを
 のみ夥しく投入れて。やうやうに埋めつ。さて田地よいなせし。故老のいひ

もて傳へたり。大凡洪水ハ降る雨よりも。土中より涌出る水の多きもの也。さ
 れば下樋より涌登る水の勢ひもて。田地のきれて浮きたるを。流るごらばほし
 めせし神々の神わざもて。夜の中よ並木の松よ繫き留をせたまひしならん。そ
 の浮田の體ごらん。畔よ竹のきばりごる。杉榛の樹の並び立ごる。そむまよ浮
 るるを。尋常ふる葉葉もて。あちこちよ繫れし。その田地ハ少も動かで。水の
 上よ渺々たり。やつびれ等ハ他領の民よて。佐倉より七里ばかり上ふる。在の
 ものよ侍れど。さのふ目前。ごらん不思議を見てか。いふ也。かの地よ、領主
 より。船四十艘ばかり出させて。人を渡せしたまひ也。百姓わなし。されば佐倉
 の人々ハ。田地を流されごらん事。こゝまたご堀田侯の徳の致せるものなりと

て。感嘆大かたならんといふ。けふ行徳まで来て聞一よ。この地の水いきのふよ
 リ一尺あまり深なりといへり。佐倉の水もさあらし。和君よめたかよはしきま
 せいごまわらんといひかけて。皆つら立て出てゆきけつ。この事いごめつらむは覺
 えしむは。雜録中よあるしおき一を。今又こよ抄し出一つ。おもふに出羽な
 る大沼の島あそび。先輩既よものよも誌し。又同國秋田のからす沼。及龜
 田の山中瀧の股なる降形といふ沼よも。亦島遊びの奇異あるよし。拙著放
 言中に收めたれども。佐倉の浮田ハこれと異なり。亦一奇談といふべきのみ。
 文化五年春より秋まで霖雨まじくせり。この年三月より八月上
 旬に至て。雨天一百零七日なり。九日まで快晴なほ稀なり。き
 附ていふ。右の前年文化の冬より。五年の春夏の頃まで。里巷の小唄本。ねん

くころく節ごひいふもの。いたく流行一とありけつ。そのうらを聞よ。
 口ごひわひいさやちおめいふむのころ。今ハ庄屋ごの、子守する。ねん
 くころくねんころりらうつへり。このうたもとい歌舞伎狂言にはじまりしを。
 つひに江戸中に推うつりて。いたく流行ま
 なるなり。又みめよりと名づけたる下品のおん餅を。市中の辻くにて賣はじめし
 もこの時のことなり。この右のうたの中に。人ハみめよりなごころといふまとのあれば
 なる。識者或いへる。今茲ハ秋のころよ至て。感冒必流行せん歟。細
 人小兒おしなで。寝々轉々を語ふこと。是病臥の兆ならんといへり。果して
 ハ九月の頃よ至りて。風邪感冒流行して。良賤病臥せざるハなく。輕きハ兩
 三日よしておしなるもありしむ。重きハその症疫熱よ。變じたる。三四十日
 よ至るもあり。或ハ庸醫よ惹られて。よみぢの針もあひけり。さのこまのあ

○安永以來のはやり風

せ狂歌よ。

とや風無常の風もまじりけりねんくころり用心をせよ

かゝて病むごむ程は關の八州いへばせら也。京攝の間まで。脱るものなかり
一とぞ。童謡はいよへより。和漢の歴史は載られて。應驗あらすといふも稀
なり。又流行病はなべてみな。年の氣運の順逆よて。せんかともなきことなむら。
それよりも猶疎まじき市井は風俗のとなれるなり。その水上を尋れば。劇場
より出のいなし。風を移し俗を易るも。三絃よこそよるべけれ。その三絃といふ
ものも。雜劇を師とするれみ。知らずひびくことならんかも。

予が東西をおぼえころより。大約五十年このかた。時々感冒よ。世俗の

名を負せしもの少からず。まづ安永の中葉はやり風邪をお駒風と名づけ
たり。こゝ城木屋お駒といふ淫婦の事を音として作り設る淨璃理のいた
と行れたればなり。又安永の末まやりし風邪をお世話風と名づけたり。こゝ
大きにお世話お茶でもあひれといふ戯語の流行一よよりてなり。又天明中よ
はやりし風邪を谷風と名づけたり。こゝ谷風梶之助ハ當時無雙の最手なり
ければ。これ勝ものあること稀也。谷風嘗て傲言して。とてもかゝても土俵の
上よてわれを倒さん事ハ難かり。わが臥たるを見まよはりせば。風をひきこる時
よ来て見よかといひしとぞ。この言世上は傳へ聞て。人々話柄としたる折。
件の風邪を谷風をひきこるはやくいふ初として。遂は其名を負せしなり。されば

○安永以來のはやり風

この時四方山人送風神狂詩あり録しててもてこゝに證す。

引道此風號谷風。関々啖咳響西東。惡寒發熱人無色。煎椽如常藪有功。一片生姜和酒飲。半丁豆腐入湯空。送君四里四方外。千住品川岡屋中。

又文化元年もやはり風邪をお七風と名づけたり。こゝ八百屋お七といふ處せ小うたの流行せしによりてなり。又文化五年の秋はやはり風邪をねんころ風と名づけたり。そのよゝい上みよいへるが如し。又文政四年の春二月の比。いと流行せし風邪をたんぼう風と名づけたり。こゝこの時のはやり小うたよ。たんぼうとんやくと謠ひしものあははなり。かゝて去年甲申の春二三月

の頃、はやり風邪を薩摩風と名づけたり。こゝ西國よりはやり初て、こゝまで移り來つればならん。此うち谷風お七風ねんころ風たんぼう風はげりかりき。家々毎は五人三人枕をならべてうち臥さぬなかりけり。西は京攝に至り。東は安房上總。西南は甲斐伊豆の海邊。北は信濃越後まで。あべて脱るものふかりよ。その折くよ友人の郵書も聞えたり。たんぼう風のはやりしとき。何ものひよみたりけん

みやこから乗せてくるまのたんぼ風ひとものもありおすものもあり
いふおかしきや。例の人の癖なるべし。おれば此風は。京よりはやり來つるよ
そ。この他寛政享和中も有けんを。こゝろ名を負せたりける歟。いふひもなと

忘れたり。押しの一條の巖は北峰子のさるしつけたる風かぜの神かみの圖説ずはつの後のちよつ
けてもいじまはほゝむるまゝよ。伊豆いづの千ちりりのりけなし言こともて。科戸しなとの風かぜの神かみや
らひしつ。鏡鎌かがま八重やえ鎌刈かまはらふと云。禿かぶたる筆ふでを走はしらせし。みろさのやこのやこ
體たみもなき。只是ただ嗚呼あゝのすきみよなん。

正幹まさたけ云。文政四年の春。はやりし風邪かぜの折。本町ほんまちなる町醫まちい西尾寛仲せにおくわんちゆうとい
ふもの。治療ちりやういたく行なはれしと云。この時半はん可山かさん人じん。俗稱よくせう植木ちぎの狂詩きやうしあ
り。因よここは録ろくしぬ。

本町無處ほんまち不な風邪かぜ寒熱かんねつ往來わうらい頭痛づうとう斜な。西尾寛仲せにおくわんちゆう傳つた妙藥めうやく功能こうのう散入さんじゆ病
人家にんげ。

○兩國河の奇異 ○庚辰の猛風 ○美日の斷木

前まへの風かぜの物語ものがたりよて。思おもひ出でせしとあるを。更さらも又またこゝよ書かつと。文化十三年
丙子へいしの秋。閏八月四日の大風雨たいふうう。予まが日記中によも志こころるし置おたり。その前日へんじつ
よよ雨あめふりつ。天明ていめいて雨あめハ歌うたたりよ。又また己おののころより大風雨たいふううよて。樹きを抜ぬ
き屋やを破やぶりつ。申まをの比くらよ雨霽あめはれて。その夜子よねこの比くら及およぶやうやとよ風かぜてけり。この
時本所深川ほんしょふかハ水みづ出でて。床とこの上うへ一二尺いちにじふよ及びおよびしといふ。志こころるよその風かぜハ南みなみよ
つして特とくは潮氣しほけを含ふみたり。さればよや南みなみを受うたる草木くさきハすべてその葉はを吹ふ凋しぼ
まされて。枯果かれはつるよ至いたるもあつけり。この年の冬十月。予まハ榎えの島しま鎌倉かまくらよ遊あそび
し。海邊うみべの松まつ毎ごとよ凋落ちようらくせぬなかりけり。かれば南表みなみなる漁村いさハ彌い烈れつしか

りけん。風は潮をまけて吹き、いこもめづらしき事ななん。是よりも猶奇しき事あり。この大風烈前二ヶ月七月十日の事なりき。侍醫山本宗英法眼其通家官醫野間氏の。本所なる宿所は赴きてのむる事。夜はや夜中とおぼしき比。兩國橋を渡す程は河上みよ一團の火焰あり。吾妻橋のむたよりして大橋の方へ遠けり。おもはずこれを仰き望つる。その光りの青と引たる。青衣の官人騎馬よして前うしろより従ひつ。火焰を守護するものは似たり。その容におぼろげなれども。すべては衣冠束帯の如くを見えてける。橋の上を相距ること凡一丈ばかりにして徐々といふゆゑを立ちまはりて猶見る程は漸々減うせしとぞ。予は次の月の下旬まで。この事ありとも知らざりしに。風聞他所

より聞えしかば。八月廿四日の日。興繼を遣して法眼を問せし。聊もたむひあらず。見一趣云云なりとて。詳は語せられけり。扱も件の法眼は。予と三十餘年ばかり。交遊の義を辱うせられたる。少年よりの友として。齡は五つ。弟よてをいせし。よりてそのいふ事も大かたならず知りたる。絶て浮る性ならねば。實説なりきと思ひしのみ。何の故に曉らざりし。後の葉月の四日。よ至りて。法眼の見きといはれし兩國河の怪物。かゝる烈風洪水のありぬべき前象ふりきと。初て思ひあはしけり。かれば橋南露が東遊記に載たり。名立崩の前月。神佛の空中を飛去たまひしといふ事。一概にい誣むたり。されより僅三年として。文政元年五月下旬。彼法眼の身まかりたまひぬ。享

年四十八歳なりき。いごをしかりける齋いごよふそ 文政癸未八月十七日の夜の

油樽あぶらづをかりせる陰火の飛行せしをまさしく見たる人あり。非常の暴風雨のときはにわかならずそのまゝしめることあるべし。

かゝて又文政三年庚辰の秋。九月八日の大風烈おほいぜき。駒込不動坂こまごめふどうざかのほとりなる。名主内海権十郎主従二人。巨樹こほろぎを撲うれて身まかりけり。そを相識あひしれる商人の。次の日は来て告つるを聞きし。権十郎が宿所しゆくしょのほとり。昔春日局むかしかすがのつぼねの別荘べつしょうにて。素もとより由緒ゆいじゆあることなれば。年々の秋毎あきごと。園そのは生なりたる栗くりを採とつ。つぼねの廟みやうに備そなへる恒例こつれいとするもの也。まかれればこの日も採とたる栗くりを。ひごこの従者じゆしやは齋いごしつ。湯島ゆじまなる天澤山てんざくさんに赴おもむきて。役僧やくそうをたしてけつ。そで辭ことばと去いる。さする程ほど。風かぜいよく烈はげとなりぬ。猶なほまはらんと留とどめられしを。まはらば

まの所勢しよせあればこゝて。いそがしとまひる程ほど。寺門ていもんを出でていと程ほどもな。門内もんないふる椈もみの木きの十圍じゆいもあまりつべと見えたるが。只ただ推揉おしこりたるやふ。樹まの真中まんなかより吹折ふきこられて。大地たいちを撲うて落おしければ。従者じゆしやの大枝おほえだは肚はらを撲うして。矢庭やにわは即死すなはちたりける。年十六とせじふなり。もの也なり。その名なを。権十郎ごんじゆらうも打うちたれて。半死半生はんじはんせいなりけるを。寺てらより駕籠かごをたすけ乗のりて。宿所しゆくしょへ送り遣つかせし。家路けちよかへり。着つて程ほど。忽たちまち息絶いきたよけり。享年けんねん四十二歳しじふにさいといへり。大風烈おほいぜきの折をりなど。鬼魅おにま蛇蝎じやくの風かぜを乗のりて。飛行ひこうすることありといへば。已いむことを得えぬ急用きゆうようならぬ。犯おとして出るでる愚おろも似にたり。まかれども又風かぜの吹ふぬ。物ものの倒たふることも有あり。近ちかとい文政六年癸未ぶんせい六年いみの夏六月廿三日なつむいじふにちの未ひつひの時ときばかり。淺草寺あさくさの地内ちないな

る。三社権現の石の鳥居の忽然と折たり。人みふ驚き怪みて、とまどくといひ
しむ。笠木の三つは折砕けし。その續目の甘き延。落る勢ひよて折たるふ
らん。折て落ぬるものならざり。とまて怪しむするもたらず。これよりいふ奇なり
と思ひし。文化四年丁卯の秋八月廿三日の未の時ばかり。御城内御焔
硝庫のほごりなる。古りたる松の二株まで。自然と折れしことありけり。その樹
は十圍のあまりつべし。この日はまかも美日よて。そよぶ風もなかりし。只是
のみよあらず。上野護國寺の巨樹。河越侯郎中の大銀杏など。おなト時刻
よ折たりといふ。これも亦一奇事なり。まかれどもこの月の十九日。深川八
幡宮の祭見んこと。永代橋を踏落しつ。凡ハ二三千人も水に没して死たり

ける。このこの噂のみ。世の人耳を側たつる最中よてありければ。件の巨樹
の折たるを。いふものもなと知るもの稀なり。又去々年癸未の秋八月十六日
の夜の大風烈し。近來未曾有の暴なりければ。奇譚怪説多かれども。まこと
しからぬ。いふものもこれり。これらに重蒙も耳よ熟して。今しも折くといふこと
なるを。又さらばいふ。誌せば。冬の透間の風よ似て。とこそ人よ厭れもせめ。世
の譚よ大風の吹たる跡といふ如く。風のはふし是までよして。黙して後のま
ごねを待のみ。文政八年
五月朔稿
百川云。余は佐倉の舊藩士ぶれば。かの地より出生せざれども。又しと住居
したれば。かの印波沼をよく知れり。いふ浮田圃の如きもの無きものぞら

ね、その蘆葦の根交錯して年久しく、その上は土自らつきて草木を生長し
 たるなり。然れども松の大樹など生せしものを見たることなし。まゝて田圃
 とせしを見ず。大かたこの沼の畔は、年々水の高は没せらるれば、貢税甚と
 低く。又全く税無き所もあり。さるがゆゑよその害を知らず。萬が一を僥
 倖して種蒔するもの多し。もし水害なきときは、秋獲豊よして大利あり。と
 ればこれを浮寶ともいふべし。浮寶浮田殆んど似たり。所謂名詮自稱なる
 もまた知るべからず。

又云。大風雨の時、怪物空中を走るなどいふは、妄誕いふよしも足らず。され
 ども空氣凝結して、人物山川をそのうへに寫し出すことあり。またあるは、うへに

海邊の屋氣樓また山市などいふ類も少なからば、兩國の怪物もそれらよ
 や。樅の木は風雨の爲に折られて人の死せしむ。さる大風雨は、必なしとも
 いふべからず。妖魔のゆゑとするは、是亦怪を信ずるの過にあらずや。松の大木
 風ふくとして折ること、常あることよして他木より絶てなり。この木の性質
 よや。又虫などの入りてその中虚となりて、あれども表面よりそれを見難くて。
 俄に折るゝに至れるなるべし。余が佐倉に在りし時、城の本丸の堀きはなる
 松の大木三抱もありしが、一日風なとして俄にゆらくと動き出したり。
 見るものこれを怪みしが、まはらして中程よりはつきりと折る。その響おび
 としく、數町の外まで聞えけり。これを怪みていかなる異變起らんなど。

一時いさ喧かり。物識るもの取て疑はず。かゝること松の木よの限
りて。他木よいなごとて例を擧ていひしかば。その尊やみてその後絶て異な
る事もあらざりき。焰硝庫の松もその類なるべし。

○年の和名並月の異名考餘

近來國學のいよきかつよ開けより。先哲後學おのく發明の辨あり。こ
れより物の名の起原なども。定かざるもの多かる。その中よ本居氏の
古事記傳に。年の和名をこいふよ耕作の義也といへり。この言尤もよ
し。もて定説すべし。只その注釋のいまだ具あらねば。尚あかぬいふとする。
愚按するに。こい言いこれきつこの義なるを下畧せしなり。唐山よて始て字

百穀播收

を造れるもの亦この義を取れり。その季と稔の兩字の如き。並よ未は從ふをも
て知るべし。字書よ未ハ戸羅切。音嘉。穀總名。黍稷稻粱。自苗至實曰未
といへり。又季ハ年の本字なり。説文よ季穀熟也とあり。もて據てすべし。稔も
亦同書よ穀熟也。正字通云。古人謂一年爲一稔。取穀一熟也。され和
漢その義相同し。かればこのことねきつくるの略辭なること疑ふべからず。唐
山ハ文華の國あり。その故よ物毒よその字三も四もありて。なかくは煩
雜をなせり。譬は季の字あるべし。或ハ稔よ作り。又歳よ作り載よ作り。又紀に
も作るが如し。按ずるよ歳ハ冬至より冬至までをいふ也。入の年歳よ歳を書
とてその義よおなじし。それ年の冬至後よ生るものハ。明年の支干よよるべ

し。今の俗ハこれ義を知らず。冬至後ニ擧たる兒も、なほその年の支干をも
 て數ふ。とてハ歳の義に稱ハず。いかになれば。歳ハ日の歩也。日の天を行と
 と三百有六旬六日有て。日の行と一周なり。これを一歳といふ。かゝるゆゑ
 也。中冬を一之日とす。日行周盡して復始る。これ歳の日歩たるゆゑん。一之
 日ハ冬至なり。周ハ十一月をもて正月とす。これを正歳といふ。職としてこれ
 由るなり。歳又載又作るよし。爾雅ニ載ハ歳也。唐虞ニ載といふ。物の終
 て更ニ始るの義を取るといふ。又紀ニ作るよし。書の洪範ニ五紀あり。その
 一を歳といひ。その二を月といひ。其三を日といひ。その四を星辰といひ。その
 五を曆數といふ。又十二年を一紀とす。歳星の天を一周するの義を取るとい

ふ。唐山ハ一事にその字多として。その義も隨て亦煩雜なることかこの如し
 天朝ハいよへより今に至るまで。このいふのみ。異名を呼ものなし。文の辭
 に及ばざるもこれ推してその餘を知るべし

先輩の考も。月の異名もすべて農事のうへにわけて唱へ來たるといふ。この動き
 なき妙按なり。さむれども注釋のふは詳ならぬものあり。よりに考餘ハ一篇
 を綴りそへて。もて遺忘ニ備ふ。博士の爲より笑はるべし

正月をむつみ月といひ。畧してむつきともいふよし。舊説にハこの月ハ良賤迭
 往來慶賀して。むつきまじき義也といへり。是究めていられなし。さむれども
 新説もいまだ詳ならず。按するよむつきハむす月也。むつき月といふもむすび

月の義ふれば相同し。この月陽氣下は蒸して。草木將は萌出んとするの勢ひあり。譬は胎生のものその胎内に蒸れ。卵生のものその殻中は蒸るが如し。故はむつみ月といひ。略してはむ月といふ。書紀神代の卷なるかむすびの尊を。神産靈と書れたり。産靈は則母徳として。子を胎内は蒸の義あり。故は神産靈と唱ふ。今の世も入れ子をむす子むすめといふ。是もむすび子むすび女の略にて。元來その母の胎内は蒸されて生出しものなればなり。されば正月をむつみ月といふもこれと同じも。漢字を借用せば。産靈月と書こそよけれ。月令に孟春之月云云。天氣下降。地氣上騰。天地和同。草木萌動といふ。凡この十六言むつみの中よこもりたり。抑亦妙ならずや

二月をきらぎといふよし。舊説にこの月の或は寒と或は暖として。更は又寒中よりむすびとあり。故は衣更着と名づるといふ。おれも亦いはれなし。又新説よきらぎは息更は來つるの義にて。東風氷を解きて蟄虫動と。いきと。天地の陽氣也といふ。こは理りあるよ似れどもいまだ甘心さむた。按するよきらぎは鋤をらぎと云ふ。この月をきく。田を鋤き畑を打ふり。この故はすき後きを略してきとらぎといふなり。三月をやよびといふよし。彌生の義にて。この月の草木いやがへは生出ればさかいふといふ。真淵の説は從ふ。四月をうづきといふよし。莫傳抄は夏かりのかへる越路のとなみ山卵のは

ふ月と何をいはず。とあるよりて卯月と書きて。此の月の卵の花
 さかりなれば。さか名つけたりと思ふもの多かる。皆あやまを傳へたるな。
 新説よりつきは植月あり。これ月の根をさけ種をたすこと尤さかりなる
 頃なればうへ月といふ。それを略してうづきといふといへり。この説いよよし。
 さばれうへ月の義ありあら。うみ月のみを略せしならん。既播たる百の
 とあつ物。みな發生たるを。或は移しうへ或はつちかひ養ふこと。譬胎内の兒
 のうまれ出たるを育るが如し。よりて正月をむつきといふもむかへて。うみ月
 と名つけたるなるべし。唐山より四月の節の中を小満といふもこの義ありあ
 へり。小満は臨月出産のころをもて見るべし

五月をむつきといふよし。舊説より早苗月とし。秘藏抄よりさとも月といふあり。
 新説より耕作の事まで古言なり。この月の稻の苗をうつし植る時よりて。
 農事は大切のよければむつきといふといへり。理りあるよ似たれどもいまだ
 詳ならず猶考ふべし

六月をみな月といふよし。舊説よりこの月の暑熱酷うして。水も乏しきあるな
 れば。水無月といふといり。東満はこれを否して。みな月かとなる月の上下
 を省るなり。この月の雷のさばく鳴るものなれば。さかなつけたるとい入れど
 甘心しむとし。又一説よりみな月の水ふす月なり。この月の田も水の乏しき
 をもて。なごく水もふすなり。よりてみづなす月といふべきを略してみな

月といふといへり。姑々の説は従ふべし

七月をふみ月といふよし。舊説よふみひらき月の略辭なり。その月の二星よ書をむけ。且書籍を曝すといふれば、ふみ月といふといへり。藏玉集よたふばたのあふ夜のそらのかげ見えてみきふらなるふみ披き月とあるはこれなり。又新説よふみ月ふえ月なり。この月の稻の葉の時に殖るころなればといへり。前のふみひらき月よいままでりて聞ゆれどもいま可ならず。按するよふみ月いふとみ月の中略なり。この月の稻の花その皮中より出て物をふとむむが如し。譬ハ頰の和名をホホといふもふとむの義なり。物の胎をばらむといふもハハホと音通して亦ふとむの義に近く。花のつぼみよ舎の字を當たるも、舎

ふとむの義あれはなり。これらよりてもふみ月のふとみ月なるを志るべし八月をばつきといふよし。舊説よ葉月あり。この月梧桐の葉落れば也といひ。一説よはち月のちを畧してはつきといふといへるは笑ふべし。又新説よこの月の稻の葉をかりよして。いまだ穂を見ず。よけて葉月といふといへるもつけがと。按するよつきをふ月のなを省るなり。この月上旬よ早稻花ひらき。中旬よ晚稻の花をかり也。依てはな月といふべきを略してはつきといへるなり。九月をながつきといふよし。舊説よ夜長月也。又新説よこれを否して。この月の稻の穂既よ長し。よけて長月と名つとといへり。按するよなが月ハ稻刈

月の略辭なるべし。稻ハイナ音通まで。體よいねといひ。用よいなといふ
稻城稻村稻光 いなのナとかるの力を省きてなが月といふ歟。かを濁音に唱
りの類のことし。いなのナとかるの力を省きてなが月といふ歟。るは音便にて
この例 月のハをさくく早稻を刈る頃なれば。志か名つけたるなるべし

十月をわみふ月といふよし。舊説は神無月なり。この月ハ諸神出雲の大社
に集合さまふよよりてこの名ありといふ。荷田氏ハこれを斥けて。わみな月ハ
雷無月なり。この月ハ雷その聲を収るのかぎり也。六月を雷鳴月といふよ
むかへて。雷無月と名つとといへれど。これも亦甘心志かたし。按するにわみな
月ハわりね月なるべし。わりねハ即刈稻也。リとミと横音まで。ナと子ハ音
通なり。よりてわり。稻をわみなと唱ふ。十月よいなへて稻を刈盡すものなれば

志か名つかけたり。九月をなが月といふも。稻かりの義なれど。稻は早晩の遅
速あり。おほよそ九月に刈をじめて。十月下旬は刈果るものなれば。この両
月同義よして異名なり。譬はねとねの如し。タとサと横音なれば。たね
も亦とね也。志かるよ種をたねと訓み。實をたねと訓じたる。これもまた同義
よして異名也。この理りをもて推すとき。なが月わみな月。同義にして名の
異ふるをわみすよ足らん歟

再按するよ十月を雷無月の義とするよし。秘藏集は四方山ハからこれ
なぬよたり。にけり志とねひまなき神なかり月とあるよよる歟。神なかり月の神
ハ。雷鳴なき月といふよ似たり

十一月を志も月といふよし。舊説は霜降月也。藏玉集。風さむみ霜ふり
 月のけふよりや雪げと見えたりともりそむらんごあり。新説もこれに従ふのみ。
 愚按するは志も月いふれおきめ月の略辭なるべし。横音なり。この月い貢の
 新穀を收斂するときはなればその名ある歟。いまだ必ご一がつけれども姑ご
 うみよいふのみ

十二月を志はすといふよし。俗書に師走と書て。この月い諸生師よ走ご故
 舊を訪へば也などいふ説あれどもあげつらふよ足らず。貝原益軒は筑紫の四
 極山を證して。ご極るの義ふるべごい入り。契冲真淵も年極るの義
 るするのみ。按するは志はすといご一ごつるの義よりあらざる。志はつるの畧辭な

るべし。この月い農事既果て未耜も暇あり。調貢の新穀を斂め果るころ
 なれば。志はす月といふよあらん。月令は季冬之月云云。命農計耦耕事。
 脩耒耜具田器。乃命四監收秣薪柴。以共郊廟及百祀之薪燎。ごい
 へるは稱へり

右十二箇月の異名。愚按の當否ごまればいよ一への聖皇。農事をもて年ご命ご月ご名
 唱ごるものあるごとなし。ごればいよ一への聖皇。農事をもて年ご命ご月ご名
 づけて。民ご耕作を勸めたまひし善政今も歴然たり。農ハ司命の奴よ一て。そ
 の身貴よあらねども。その業の重きご。何ものか亦あらねご加へん。後世曆ごい
 ふものいで來ごしごも。民ご時をうごせごごの爲なれば。正月二月ご數へ

んより、この異名をもて農を勸めば、いふことよもまます捷徑なるべし。さるを後々よ
 至りてハ、藏玉莫傳秘藏の諸集よ、月の異名をこちたて出いて、歌よまますべき
 爲よのみせられ、いひかよそや。物の名義の多なるハ、漢國ふりよて紛れ易く。
 物そこれわらば、いふことよ、いひか、いふことよ、わらわらねども、いふことよ、いふことよ、月の異名
 の考餘を綴るよなん。多かる中よいふことよ、いふことよ。取らるることのありもせば、新奇
 よ走る恠談よ。いふことよ、いふことよ、いふことよ、いふことよ、文政丙戌
 二月稿

○古きはんじ物の盃考

津藩の博士鹽田ぬし。号隨齋。古き盃を携來て、予よ鑑定せよといふ。こは同
 藩なる佐伯環てふぬしもの也。むらうと鹽田ぬしも得考へず。ひろき津

の人々も思ひごとよ、なきものを、いひよして予が知るべきと思ひつゝ、つらく
 見るよ。徑りハ匠尺三寸九分。盃の底淺うて今様と同くからず。盃中よ
 時繪あり。龍頭人身異形のもの冠をいたきて束帶せず。疎服よして圓中よ
 六曜の紋つけたる裳をすこし結み。酒樽ひとつと錢五百ばかり肩にして挑
 灯を提たり。挑灯も同そが、いふことよ、歌舞伎治郎の黒き羽折を着て、一刀を
 帯さるが從ひゆとよま也。治郎の羽折に五三の桐の紋あり。下のかたよ水ありて波高と立り。水
 中よ蓮の花さきたると葦一本あり。又流るるとり枕あり。波底よ沈みなん
 く、いふことよ、半體を畫きたり。又盃のうらよも時繪あり。いふことよ、いふことよ、積のぼし
 たる佛經七巻ばかり巻毎よ標題あり。綉彌勒佛と讀るが如し。いと細書な

れば老眼らうがんも定さだむならず。そが左右ぼつすは拂子たたらと大筆おほなひあり。机つくえのわたへは筆すぢの琴ことあり。琴ことのほごりすいりは硯箱すゐりばこ一具ひとつと料紙りょうしあり。料紙りょうしハ銀泥ぎんていをもてまきたるがその銀ぎんやけて薄うすと色いろよなりたり。畫えハ當時そのときの俗畫そくがなれども。時繪ときまの精妙せいみょうなる金粉きんぷんの佳品かひんなる。今の細工こまかは得えびたきもの也。

按おしするまこの盃さかハ延寶えんぽう貞享じやんかうの比ひの製作せいさくなるべし。若わかさらずとも元祿げんろく以後いごのものものいあらす。いひよんなれば、當時そのときはんじ物のいたと行ゆれたれなり。この外ほかにもあり下に
時とき代だいの考こう

因よ云い。四五百年ちよんねん已前いぜんより。なごくの行ゆれし事こと無住むじゆうが沙石しゃせき集しゆの問もん答たふ
ハまたくな兼好けんこうが徒然草つれづれくさにやうの類るいも見えたり。さらでもむかし至尊てんしぞに似にたり。

のあそばしたる何曾なぞの御集ごしゆあり。當時そのときの流行りゆうかうを知るしるは足たりれり。何曾なぞの御集ごしゆ書類しゆり從中じゆうちゆうかゝて近世きんせい慶長けいぢやう寛永かんえいより元祿げんろく寶永ほうえいの頃ころまでも。謎なぞを畫かきて衣裳いさうの模様もようよせしこと行ゆれ。商人あきうぢの看板かんばんすら謎なぞよきたるが多おほかりしを。あべてはんじ物ものと唱なへたり。そが中なかつは酒賣さけうる家の門かどは杉すぎの葉はを建たたるハ。味酒あじさけの三輪さんりんあつといふ謎なぞ也。このことハ一休いっけに歌うた又湯屋ゆやの軒端のきばは木きをもて造つくれる箭やを出だせしといふ謎なぞなり。予よが總角そうかくのころまでかゝる看板かんばんをいませし錢湯せんたう見たみた酢すを賣うる家の看板かんばん。水糞すいふ或あるハ味噌みそ篩せを出だせしハ。す有ありといふなり。又衣裳いさうの模様もようハ。芥子かゐと琴ことと菊きくを染そたるあり。こゝろをいふはんじものいふはんじもの也。又鎌かまと輪わの字あざを染そたるハ。かまといふはんじもの

也。又器材もろこのハ大酒官底深たらしめくわんせこふか池上太郎いけのうえたろうが盃さか。龍りゆうと蜂はちと蟹かにを時繪ときえしたるハ。のめ龍りゆうとす蜂はちはむハ蟹かにといふ酒語しうごのなぞ也。これらハ當時そのときの冊子さふし遺のこりて。徴あかしとすべきものなはん。よりにおもふ。この盃さかハ時繪ときえしたるも。當世そのときの流行りゆうがうはまたがへるはん。物ものと見ゆれども。定さだかハ解ときかたかり。試こころこよそのころをいひ。

龍頭りゆうまづの人ハ。のむといふとんじ物もの。これハ冠かんむりをいたがせし。大臣だいじんといふはん。ものなるべし。凡遊興いつしきやうハ耽たかる黄金家かうごんけを。大臣だいじんといふこと。今いまは志しかたなり。物ものに臣おみ又大盡おほたじんとそが肩かたに志したる樽たるハ。酒しうといふこと。錢せんハ買かふといふはん。物ものなり。又提あげたる挑灯てうちんハ。一寸先いちゆんせんの暗やみの夜よといふ世話せわのはん。物ものあるべし。挑灯てうちんのちもあるし。

元祿中げんろくちゆうの物の本ほんにかくのことき挑灯てうちん所見しよけんあり。又治郎ちやうらうハいろといふはん。物ものなるべし。治郎ちやうらうをいろ子こといへばなり。この治郎ちやうらう草足袋くさあしふくろをはきたり。又蓮はすハすといふはん。ものあらん。蓮はすの和名わななはすといふも。その實みの蜂房はちうらハ似にたれ也。よりに蓮はすを蜂房はちうらハかけてとすと解とせん爲ためなるべし。又蕪菱うしやうハ管くだといふはん。物もの歟。よしあしハ多おほく管くだハ造つくるもの也。筆ふでのさや花火はなびジャボン。又枕まくらの半體はんたいを畫かきし。まもといふはん。ものならん。まくらを下略げりやくす。水波みづなみハ只蓮はすと草くさのこり合あはせたまふて。とせらる。いろなからんを。強つひて説はなをなすとき。すいちうといふはん。物ものといはんも由よしあり。水みづ粹すい音ね嫖客びやうかくを粹すいといわんはん。つ。連れん續ぞくしてこれを解とは。同音どうおん嫖客びやうかくを粹すいといわんはん。つ。連れん續ぞくしてこれを解とは。色いろと治郎ちやうらう酒樽しうぞん買かふ錢せんすいちうの水中ちゆう大臣だいじんハ冠かんむりのんだり。龍頭りゆうまづとしたり。蓮はす房ぶどう。

とだを兼鼓まゝ 枕の半體 一寸先のやみの夜 挑灯

かこの如くなるべき歟。いまだ當否をきらねども。當時のはやりつゝをばんじものよせーものなるべー

當時五三の桐の紋つけたる治郎を考る。寛文中は杉本六彌是なり。かれば治郎の六彌のすははそのなむれをこむ色子よてもあらんかし。龍頭の人の衣は六曜の紋ある。この盃を造らしたる主の定紋よてもあるべし又盃のうらなるはんじ物。佛經は 大筆を添たる。ひつぎやうといふこと歟 筆經に 拂子の欲スといふはんじ物ならん。机のこの三ことを載たるより合せのみならず。倚といふはんじ物なるべし。又料紙硯箱の書なり。筆ハ琴也。これを

を連續してとく。そのいゝろい

ひつぎやう 畢竟 琴 筆 硯箱 酒は 酒の盃中 倚らん 机 ぼつす 拂子といふはんじ物なるべし。唐の白居易の琴酒詩をもて三友とすといふ事あるを。おもひよせたるならん。只 綉彌勒佛 といまだ詳ならず。この綉佛の故事なるべしと鹽田のしいへり。かれば亦是酒よ縁あり。この説まことよなるべき歟。袂を分つのははじめてこれを聞よければ。聊といふざるすの。なほよく考察してのむらてものよせーものなるべし。

追考。古文前集杜甫が飲中八仙歌に云。蘇晋長齋綉佛前。醉中往々愛 逃禪。注蘇晋學。浮屠術。嘗得 胡僧慧澄 綉彌勒佛一本。晋寶之嘗

曰。是佛好飲。米汁。正與吾性合。吾願事之。他佛不愛也。この盃の時
繪なる。綉彌勒佛の。全とこれより出た。

予が老邁四十年来。筆硯の疲勞を覺ゆること。月より彌まらざる。とりけ
れども著述ハ世わたづの爲なればいかにせん。その他交遊の請求たるも。考る
事物書と事ハつやうけも引ざりしを。この盃を見るよ及びて。好事の痴
癖みづから禁せず。そとに筆を走らせし。言葉を入い長くなりぬ。恐らく僻
言なるべきよ。再思せばやごもふものから。鹽田ぬしがこの盃を見するこの
いと遅くて。既歸期よ及ぶといへば。暇あらでやみよき。もし拙考の如く
ふらハ。古人泉壤百年の後。知己ありといまこのみ。終は鄙歌をもて賛するこ

と左の如し

池上の蜂龍よりみたみよてこの理ハふむきふその盃

文政十年丁亥春三月下旬 六十一翁 兼笠漁隱稿

百川云。この歌よいふ池上の蜂龍の盃ハ。かの水鳥記なる酒戦よ用ひしも
のよして。蜂ハとす。龍ハのむといふ何曾なるよし人の知る所なり。すべて昔ハ
獻盃の間ハいろくの風流を盡したるものと見ゆ。漢土よも酒令とて謎
の如き詩句を解とを令として。解すること能はざるものよハ盃をさす例なり。
吾邦よいさる事ハ聞えされども。盃の畫よなぞをさるせし。これを解と解え
ぬよより。飲むと飲まぬなどの誅ありしよや知るべからず

○疊翠軒の記

あし曳ひきの山の峽かひ。あるは百傳もひつたふ巖いはほどりなどよ。おはつから生出なましより。いその
かこふるき名所なごころをとつねぬる。風流みやび旅人たびびとにめでらるるは。松の隠逸いんいつなるもの也。又
そをこちたご園そのは裁きて。あるごも折をく來つふむめ。むいむいを旨むねと賓客きやくごねのも
てなごごにせらるるは。富貴ふきの松とやいふべからむ。ごるも物換り星移りぬれば
あるハ木のみちの番匠ばんじやうは研まられ。或は樵夫せうぶは摧くだれどとして。千歳ちとせの齡いばひあるよか
ひなご。色いろむごどりし操ますら。人あわれむおもごるごし。そが中よみちのと武隈たけぐま
の後の松。又義經よしのねのいこひ松。高砂たかさごの峰みねの上。辛崎からさきのひごつまつ。住吉すみのとの岸しの
姫松。おなじわたりの浪速屋なみはの松。武藏國多摩郡宮本村むさしのくにたまごほりのみやもとむらなる相生あひまひの松。江

戸麻布あまふなる一本松。又根岸ねがしなる御行おんぎやうの松。おれ餘も名勝古跡めいしやうしせきの松のみ。た
つきのうれひなきよし。名なのいご高たかきよよめて也。かれば松をめぐる人。かふら
すその樹きは名つごべし。こよ風流みやびの君子くんしあつ。疊翠軒おひさすいけんの主人あるじ是なり。性さがごし
て松をしも。めでたき物ものは思おもひなして。軒のきよの名を負おふたり。かごても猶なほあひ
すやありけむ。蟠松ばんしやうといひ琴籟せんさいを稱なづるごぞ。むべやごなき君よ一ひとて。はやと松栢しやうはく
の心あり。この樹きを庭にわは裁きしよ。蕭々せうせうたる雨のゆふ。霏々ひひたる雪のあした毎ごと
よ。こころのあつたむき流なす。ごをさひごふるのみならで。彼天陵かのてんろうのかき松も。又
大谷おほたにのせき松も。居かなびらよして見るよしあり。抑山おさくに松なければ。そが翠すい
微ひうるいしからす。いいなまて疊翠おひさすいといふ歟。又ふしわたかまるひら松も。幾雪霜いくせつそう

は壓おさされてこそ。終つひは龍蛇りゆうだの形かたちをなすなれ。是こゝよりて蟠松ばんしょうといふ歟。且かつ琴ことの音ね
 の峰みねよりかよふ。軒のきの松風しょうふうの志こころらふ。天籟てんさいもよつとまりつゝふて。曲まがを資たくるよ
 似にたればや。琴籟しんさいをいふならむ。げよ此君このきみの庭にわの松。既すでに是等これらの佳號かごうあり。
 よしや高砂たかさな唐崎からさきの。いづりゆるよ及およばすとも。賢嗣けんし英孫えいそん世々よよに禁こて。樵夫しょうぶも
 折をらず。番匠ばんしやうも祈ねがはず。木の志こころれすといふ麻布あふよも。志こころるきりの名なこもろ共ともよ。千
 世よろづ世よまて久くゝかゝるべし

○竹をめぐる辭

人の世よに用もちある。竹たけの志こころすものなごなむ。長頭丸ちやうづゑまるいよありける。その似にたるを
 おもひみるよ。冬ふゆの柳やなぎの志こころう〜志こころまは。瘦うすたるをうたのうすものを着きて。物を思

ふむ。いづりなりつゝかゝらぬ。枯野かよののすき霜しもの入い江えよゆる。藤ふじの志こころり。つゝ
 かれ女の。果はつと見みえて招まねともひふ〜。かれは竹たけの穂ほよ出す。花はなもふと紅葉もみぢ
 もせむ。常磐とこひわは縁ゆかりめてゐる。白妙しろたへの雪ゆきの〜のよ。孟宗もうそうが孝こゝろをあらう。風
 そよぶ月のゆふべよ。萬よろが孤ひとり志こころを資たくけり。露つゆの涙なみだのまだら竹たけ。娥皇わがう女によ英えいの
 操あそびを傳つたへ。姿すがたな。竹たけの節ふしの内うちよりこそ。蘇奕そいつ姫ひめはなりいでたれ。竹たけの林はやしの七なな人の
 翁おきなも。竹たけの漢かんなる六むたりの傑たけな入いも。ひとり王徽わうけい之の碑いしぶみ物の。殊ことたらふめてこ
 つひへりて。ひとり日ひも忘わすれりしよはふむ。あるは又また柯亭かていのたるき竹たけ。煤すすび〜
 後のちよ蔡邕さいおよ知られ。蟹谷かざやのよき竹たけ。黃帝かうてい採とりて律りつよせ〜。和漢わかんの故こ事じ多おほ
 かるを。いづりたなくいづりつゝかゝれど。八幡やわたをらすの藪やぶ。笛ふえをつげ子こよせら

るを悟らず。豊藏坊が鞍馬の筈に。化して竹夫人よやなりよけん。色もつとわ
る叟媪も。花まつ春のあーたより。この君をもて杖とせば。つらもつきの老を
扶けて。その子らも。は喜むべしとぞ

正幹云。この文章二篇あり。天保し未の年。翁六十九歳の時。幕府の士石

川氏通稱左金吾權翠軒と号すの需まか應こたじて作られしもの也。石川氏通稱

寄合席三千石麻布古川に住す

地を寄よて翁の自筆をごれしかは書して與あへられしよし日記中に見え

り。抑石川氏ハ少年より讀書を好み。詩書筆札を能よし。且和文の小説を

嗜たみて。翁の方外の友ふりしかば。ハ大傳第九輯七の巻端くわんたんよ。そが詩文の

小序を載のせられし。さればは翁秘藏の珍書兎園小説耽奇漫録なども後の爲の記などの類

大かた寫しとりて多と家は藏せりと聞し。年いまだ四十よに至らずして

天保辛丑の年早と鬼籍おにせき入いりしかば藏書も多と散逸せり。そが中うち兎園

小説せうせつ予が家は絶たるものなれば見まく欲せし。友人大槻修二ゆこりな

と石川氏の寫うつしたるものを購かひひ得たり。よりて予借寫しやうして藏本ざんぽんとなりた

り。こもまた奇きといふべし。物の聚散しゆさんの常つらなきを歎なげするのあまり。聊いさこよ

志るしべ

曲亭雜記卷三上編

終

明治廿二年七月三十日印刷
同 廿二年七月卅一日出版

編輯兼發行者

東京府平民

渥美正幹

東京四谷區四谷仲町三丁目十九番地

幸田勝三

全日本橋區本石町一丁目一番地

常磐橋活版所

全日本橋區本石町一丁目壹番地

東京神田區南神保町二番地

捕弘堂

東京京橋區南橋馬町二丁目十二番地

吉川半七

發賣所

同

印刷所

印刷者



曲亭雜記卷三上編 終

明治廿二年七月三十日印刷
同 廿二年七月卅一日出版

編輯兼發行者

東京府平民

渥美正幹

東京四谷區四谷仲町
三丁目十九番地

幸田勝三

全日本橋區本石町
一丁目一番地

常磐橋活版所

全日本橋區本石町
一丁目壹番地

東京神田區南神保町二番地

博弘堂

東京京橋區南傳馬町一丁目十二番地

吉川半七

版權所有

印刷者

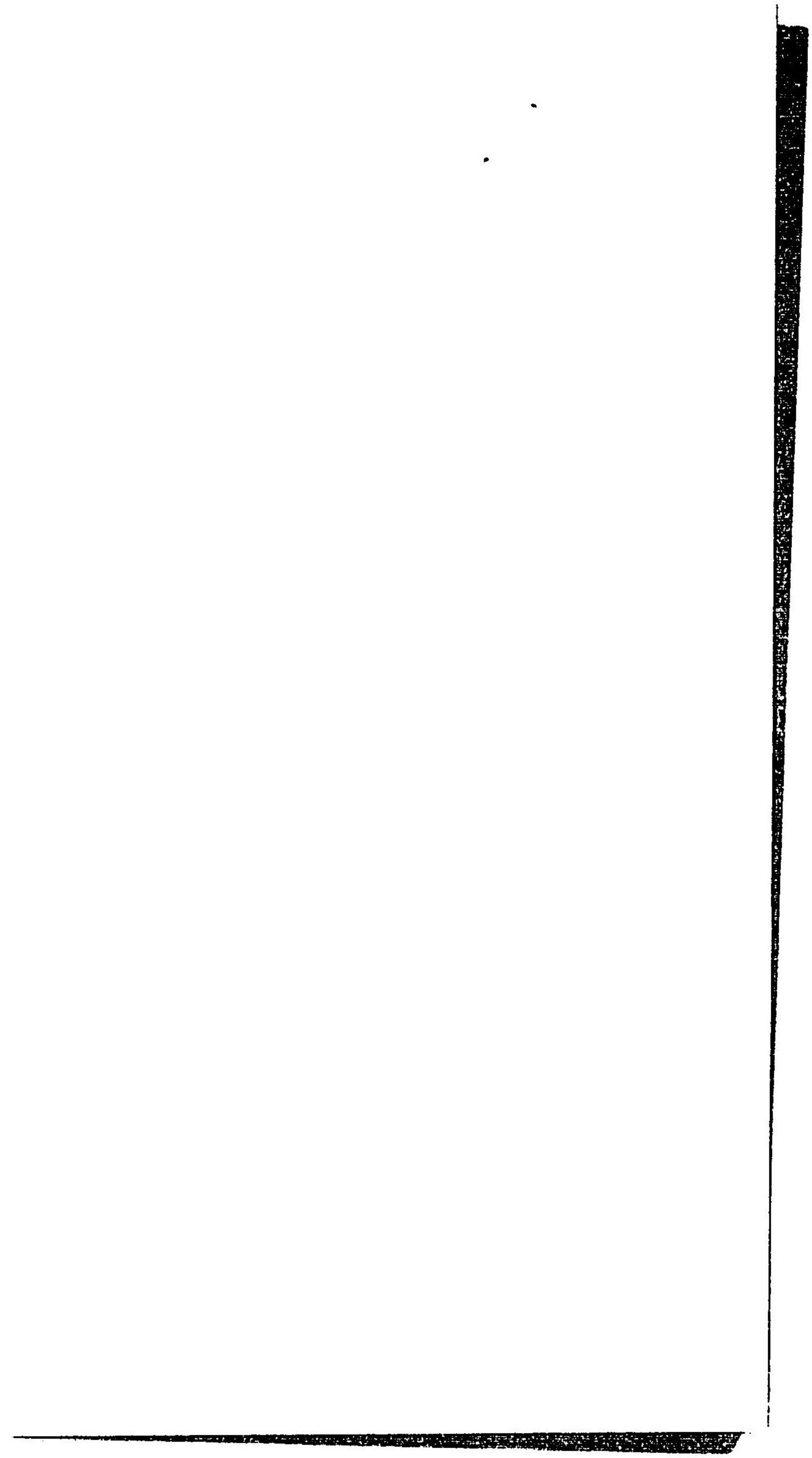
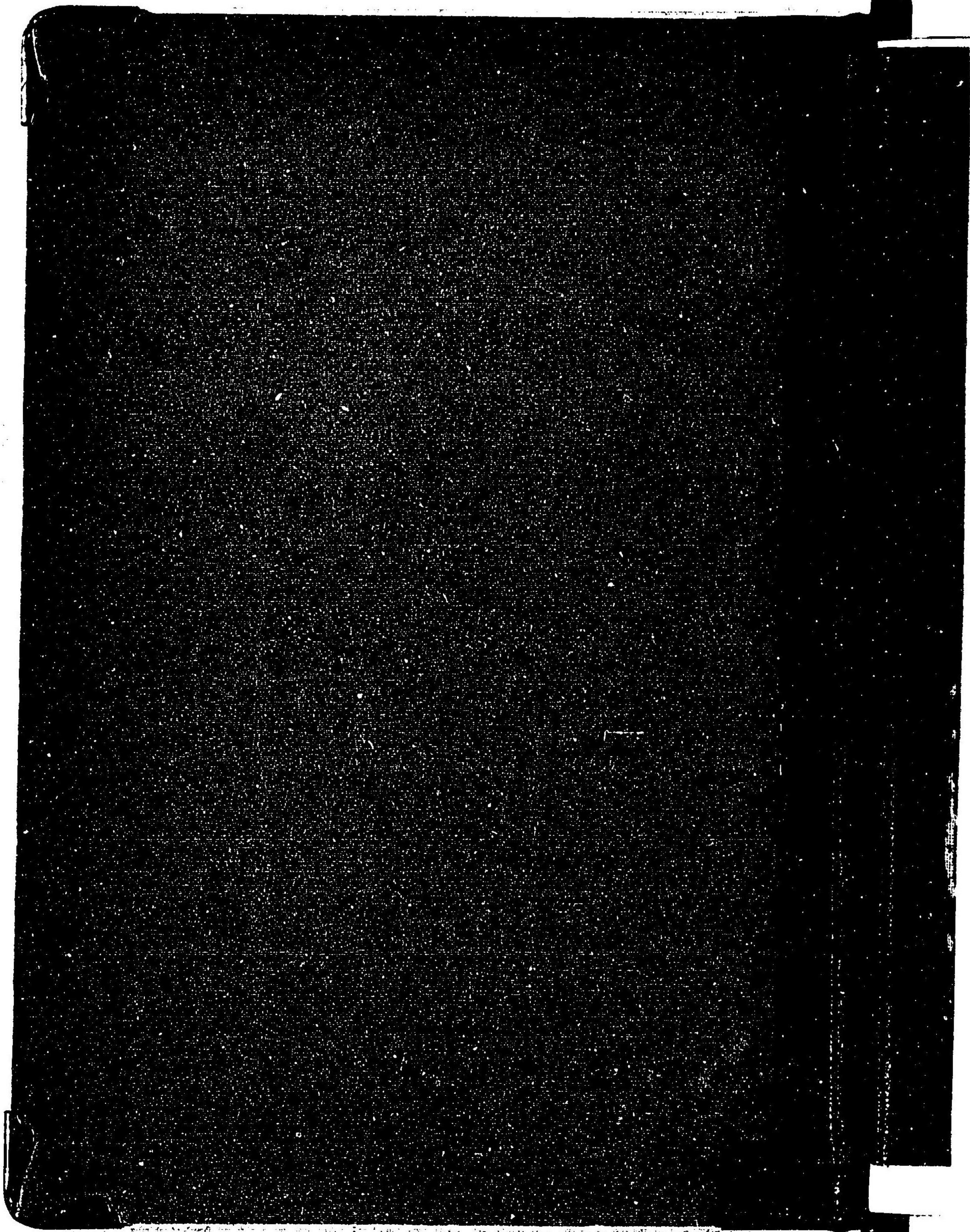
印刷所

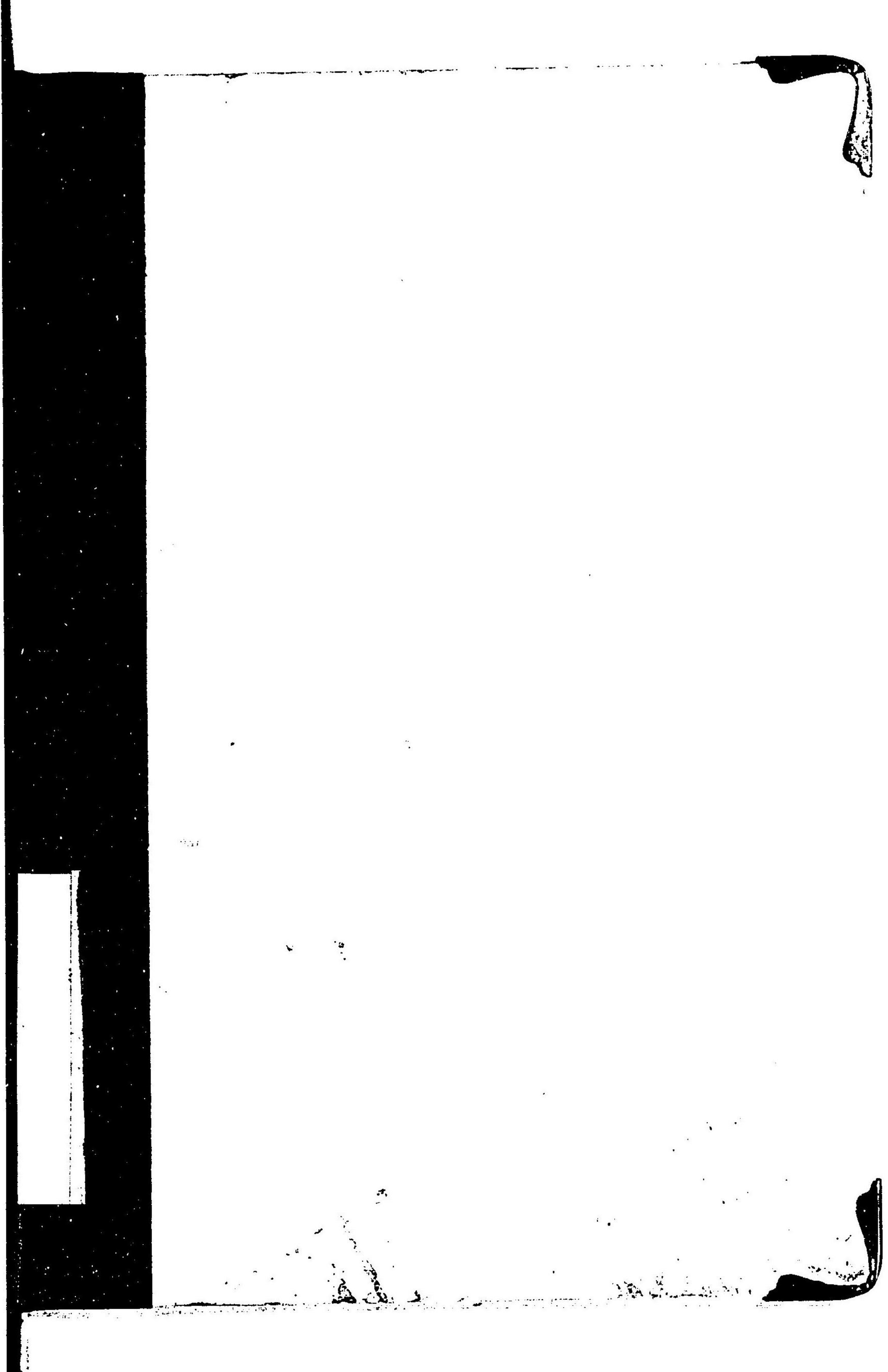
發賣所

同

遞信省認可

5
k2





914.5
Ta6Z4kz

曲亭雜記
3輯上
国立国会図書館

